

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 2 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00438

研究課題名(和文) ミンストレルショーと初期ミュージカルの研究：舞台芸能交流の観点から

研究課題名(英文) Study of Minstrel Shows and Early Musicals: Perspectives on Performing Arts Exchange

研究代表者

ウェルズ 恵子 (WELLS, KEIKO)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：30206627

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：ミンストレルショーは都市下級労働者に加え郊外や農村の中間層が演じる劇場でも愛好された。娯楽的な枠組みは1920年代以降のラジオ番組にも接続し、芸人聴衆双方の移動性の高さと多文化多言語性を背景としつつ、環境の摩擦を逆手にとって人心を捉えた芸能であった。この特質は、アメリカ文化が大衆に流通しやすい性格を持っている点と、差別やステレオタイプ化といった社会の影を笑いの起爆剤とした点において、正負の伝統として後世に引き継がれた。一方、初期ミュージカル劇はミンストレルショーが広めた音楽とダンスの魅力をおペラに付随する上流意識と新しいアメリカ音楽とに接続し、言語によって物語性を展開して独自の文化を成し得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、19世紀から20世紀前半のアメリカを代表する文化であるミンストレルショーと初期のミュージカルショーについて、その後のアメリカのポピュラー音楽や娯楽映画(ミュージカル映画とディズニー映画を主とする)の母胎となって生き続けている文化的要素は何かを追求した。本研究の意義は、表現上の人種差別やジェンダーバイアスによって批判される一方で文化要素としての潜在的な影響力については十分に研究されてこなかったこれらの芸能について、大衆娯楽文化や文学、音楽、舞踏の連続する伝統という観点からどのように解釈でき、どのような意味があるのかという問いに向かい合ったことである。

研究成果の概要(英文)：Minstrel shows had had a significant influence on the popular culture because of the diversity of the audience and their performing characteristics. The entertainment framework of it was connected to radio programs from the 1920s onward, and while the high mobility of both performers and audiences and multicultural and multilingual backgrounds made it an art form that captured people's hearts. This characteristic was passed on to future generations as a tradition of American culture in two ways: its global and mass-circulation nature and its satirical comments on the shadowy aspects of society, such as discrimination and stereotyping, as a source of laughter. On the other hand, early musical theater connected the appeal of music and dance popularized by minstrel shows with the highbrow consciousness associated with Opera and the popular attraction of American music. It also developed a unique culture by introducing America-ness into popular Opera plays.

研究分野：アメリカ文化・文学、ヴァナキュラー言語文化

 キーワード：Minstrel Shows ミンストレルショー Vernacular Culture ヴァナキュラー文化 Song Lyrics 歌詞
 ミュージカル 文化変容・文化移動

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

19世紀から20世紀前半は、アメリカの国力向上とともにその大衆娯楽文化が強い影響力を培い、アメリカ文化が世界の娯楽文化をリードするようになる基礎ができた時期である。この時期のアメリカを代表する文化に minstrel show と初期のミュージカルショーがあり、この二種類の音楽舞台娯楽芸術がその後のアメリカのポピュラー音楽や娯楽映画（ミュージカル映画とディズニー映画を主とする）の母胎となっている。アメリカの芸能に関する研究は1970年代から今日まで、特にフォークロアと社会学の分野で、アメリカ研究の重要な一部として充実し続けてきている。芸能ジャンル別に内容が詳細さを増している膨大な数の既存研究には、他方で、比較文化や文化交流の視点の弱さを指摘することができる。アメリカ文化のヨーロッパ文化に対しての独自性や優位性を保証する価値観は、ナショナリズムの高揚とともに1850年代から半世紀以上にわたり知識人の関心の的であったが、今日ではもはやそれを主張する必要がなくなった。そのために、アメリカの芸能や大衆娯楽の研究はそれらが独自だという前提で行われがちで、文化的にグローバルなコンテクストにこれを置いて検討すべき点が課題として残されている。加えて、アメリカ大衆娯楽文化は、主に19世紀後半から20世紀前半に流入したヨーロッパ系の移民によって創作、工夫された。急速に経済発展する都市で、移民集団の枠を超えた娯楽の必要性が高まった。多言語多文化状況で発展した娯楽文化の特徴は、使用された英語の単純さと身体言語での複合表現にあった。その点を重視した研究が必要である。このような背景のもとで本研究は計画された。

2. 研究の目的

上述した背景のもとで、本研究ではアメリカの大衆娯楽文化のうち、特にその発展において重要な役割を果たした minstrel show と初期のミュージカルショーの文化・文学を、19世紀から20世紀前半の文化交流史的な文脈において研究した。具体的には、(1)大きな枠組みのコンテクスト研究と、(2)ジャンルに特化したケーススタディとを組み合わせたい（これについては、目的と方法の項で詳しくのべる）。そして、「minstrel show と初期のミュージカルショーは、大衆娯楽文化・文学の、連続する伝統という観点からどのように解釈でき、どのような意味があるのか」という問いに答えることを目的とした。この時期にはヨーロッパからアメリカに大量の移民が流入し、かつ2回の世界大戦でヨーロッパへ多くのアメリカ兵士が移動した。アメリカ国内では、南部から北部へ向かう黒人の大移動もあった。本研究は、こうした時代の影響を受けて展開した minstrel show と初期のミュージカルショーを、「人々とともに移動して熟成した芸能の伝統」という視点から、アメリカを軸にしてみた芸能史の中に明らかにするものであった。さらに、本研究の特色は、芸能を「音声と身体で表現される文学」として捉えること、芸能文化の連続性から分析することであり、現代社会における大衆娯楽芸能の存在価値を指摘し、時代の文化的ダイナミクスを明示するところにある。

3. 研究の方法

(1)文化史の把握（二次資料研究）

人の移動と文化の関係を把握する

南北戦争および二つの世界大戦の経済的影響と文化の関係を理解する

(2)minstrel show とミュージカルショーの発生および展開（一次資料の収集及び整理）

中心的なアーティストやプロモーターの文化背景を明らかにする

個別作品の分析と解釈をする

(3)成果のまとめ

4. 研究成果

役者が顔を塗ってコミカルな役を演じるヨーロッパの喜劇の伝統はサーカスのクラウン（ピエロ）に明らかであり、喜劇ショーで白塗りのクラウンとペアになるハーレクインと呼ばれる無言の道化は通常黒い仮面をつけていた。William J. Mahar が *Behind the Burnt Cork Mask* の序文で指摘するように、ハーレクイン（イタリアではアルレッキーノ）を様式化していたイタリア喜劇はイギリス演劇に大きな影響を与え、minstrel show の舞台はこの伝統の下で成立している。*The Bohemian Girl* というオペラ作品（ロンドン公演 1843年、ニューヨーク公演 1844年）の “In the Gipsy’s Life You Read” という歌曲は、minstrel show で “In the Darkies Life You Lead” というふうにロマ人が黒人に変えられて登場する。

芸能者は大西洋を往来し、ヨーロッパ喜劇や音楽芸能、見世物芸能などのアメリカ版を工夫していった。他方、minstrel show の役者たちがアメリカ南部へ行って黒人の様子を研究するというのではなく、作詞作曲家も現実の黒人に関心を持たなかったことは全く同様であった。19世紀前半のアメリカ南部黒人文化と minstrel show との影響関係を主張するのは困難である。芸人が顔を黒く塗ってコミカルな役を演じたのは、記録では1820年代にイギリス人の Charles Matthew が初めてだといわれる。ニューヨークでの公演に招かれてアメリカを訪れた後で、イギリスに帰って *A Trip to America* という作品で初めてアメリカの黒人を演じた。

その後アメリカでも同様の役作りが行われ、黒塗りのコミカルなキャラクターを大流行させて minstrel show への道筋を築いたのが、Thomas Dartmouth Rice (1808-1860) であった。Rice はボロを纏った田舎者を代表させる「ジム・クロウ」(Jim Crow) というキャラクターを創作し、イギリスで流行していた「イタリアン・オペラ」の曲を次々とアメリカの状況に合わせて作り直して自分のレパートリーとした。1830年代に、Rice による“Jim Crow”または“Jump, Jim Crow”とタイトルされた歌が大流行する。同時期に George Washington Dixon (1808-1861) は、都会の自由黒人を揶揄する「ジップ・クーン」(Zip Coon) という別種のキャラクターを創作し、“Zip Coon”や“Coal Black Rose”などを流行させた。ジム・クロウとジップ・クーンは強力な差別的ステレオタイプを社会に供給し、後年アメリカにおける黒人差別の代名詞ともなった。こうした歌の流行によって喜劇役者のショーが音楽ショーとして独自に展開していく。

minstrel show は、黒塗りの道化の顔と典型的な道化の性質が、舞台上の架空性をさしおいて現実の人々を厳しくステレオタイプ化してしまうという倒錯した現象を生み出した。1840年代から50年代にかけて、北部では奴隷解放論が唱えられ始め、一般労働者の中には見たことのない黒人に対して不安や脅えを感じる者が少なくなかった。minstrel show が提示する道化としての黒人像は人々の警戒を和らげ、現実のアフリカ系アメリカ人と混同されたまま受け入れられていった。ニューヨークに寄港する数多くの船舶で働く人々も minstrel show の重要な観客であったことは、船員の歌に多くの minstrel song が記録されていることからうかがえる。ブロードウェイで minstrel show が盛んであった当時の観客は、各地からの移民や船員など多言語多文化の雑多な人々で、その関心をつかむための工夫のうちで効果的だったのが、歌謡と足芸を含むダンスパフォーマンスと人種差別を使った笑いであった。

一方で、ショーマンたちはアメリカ文化の独立や独自性が求められていたこの時代の思潮に敏感に及び、minstrel show をアメリカ独自の芸能として国内外に売り込んだ。研究者も minstrel show がアメリカ独自の文化であるという立場を疑わず、そのように語った。

アメリカ独自を印象付ける言説や宣伝手法は、後にジャズやブルースといった黒人由来の音楽文化の枠組み作りにも活用されていく。

minstrel show は、アフリカ系アメリカ人をステレオタイプ化して彼らの人生に重い枷をはめたという事実から、階層と人種の差別構造を批判する文化的材料として、アメリカの枠組みの中で研究分析されることが多い。一方で、ショー歌謡のアングロ/アイリッシュ・アメリカン音楽との深い関連や、この芸能が音楽および舞踏を中心とする娯楽として後のアメリカ文化に様々な影響をもたらしていることについては、研究が十分とはいえない。その背景のもと、本研究で分析した minstrel show のごく初期の流行歌謡の資料と、minstrel show が大流行するなかで書かれた文献からは、ショーとは切り離された場面でアメリカ人の愛唱歌として根付いていった歌の数々を確認することができる。またマニュアル本(1899, 1926)からは、minstrel show のアマチュア劇団への広がりがわかり、内容を比較すると、サーカスから派生したショーが次第にミュージカル演劇に移っていったことが確認できた。まだ minstrel show が公演されていた1928年に出版された解説書では、演じる側がこの芸能をどう捉えていたかがよくわかる。これらの文献に付随する挿絵や写真は多分に差別的でグロテスクでもあり、歌詞も資料の文面にも再流通にためらいを感じさせるものが多数含まれていた。パフチンに言及するまでもなく、笑いは差別意識に根ざしたところで生じるという認識が新たになった。

minstrel show が大流行した50年代には、周知のように黒人の minstrel 劇団や黒塗りをする黒人コメディアンも現れた。その後、黒人の演者たちは聴衆の要求と自らのアーティストとしての欲求を調整しながら、困難を排しつつヨーロッパ喜劇やサーカスの伝統が色濃い minstrel show とは異なる芸能の流れを作り、アメリカ文化を牽引した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 ウェルズ恵子	4. 巻 33
2. 論文標題 100年生きたラブソング：恋歌の系譜と1920-30年代ブロードウェイ・ミュージカルの歌詞	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立命館言語文化研究	6. 最初と最後の頁 249-265
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 ウェルズ恵子	4. 巻 52-8
2. 論文標題 アフリカン・アメリカンの歴史と音楽：奴隷制以前から1910年代のアメリカ黒人音楽――制度的暴力の巨石の下から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ミュージック・マガジン	6. 最初と最後の頁 36-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ウェルズ恵子	4. 巻 -
2. 論文標題 「黒人は何を歌ってきたのか」が差別的質問になりうるワケ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代ビジネス	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 ウェルズ恵子	4. 巻 -
2. 論文標題 大坂なおみが巻き起こした「大議論」の意味：そして、黒人の歌に訪れる新時代とは	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代ビジネス	6. 最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 ウェルズ恵子	4. 巻 -
2. 論文標題 大統領選で真っ二つのアメリカ、「分断」から何が生まれるのか：「歌」という視点から考えてみると	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代ビジネス	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 ウェルズ恵子	4. 巻 -
2. 論文標題 幸せになりたい人の炎の声：ジャニス・ジョブリンとブルーズ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 河出書房新社文芸別冊「ジャニス・ジョブリン」特集	6. 最初と最後の頁 90-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ウェルズ恵子	4. 巻 30.4
2. 論文標題 ヴァナキュラー文学の研究：定義、課題、提言	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立命館国際言語文化研究	6. 最初と最後の頁 133-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 ウェルズ恵子
2. 発表標題 ヴァナキュラー文化とベルソナ
3. 学会等名 ヴァナキュラー文化研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 ウェルズ恵子
2. 発表標題 《声》の排除の三段階を黒人音楽に探る：奴隷解放からBlack Lives Matter運動まで
3. 学会等名 「ジェノサイド x 奴隷制」研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 ウェルズ恵子
2. 発表標題 ヴァナキュラー文学の研究手法：『ヴァナキュラー文化と現代社会』のエッセンスと主張
3. 学会等名 東大研セミナー・現代民俗学会第43回研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 ウェルズ恵子
2. 発表標題 黒人音楽の軌跡を辿る：歌は抑圧と抵抗を訴えるか
3. 学会等名 早稲田大学異文化交流センタートークセッション（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 ウェルズ恵子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ユーリカプレス	5. 総ページ数 1745
3. 書名 ミンストレルショーと音楽：アメリカ初期資料集成	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------